





国語問題

はじめに、これを読みなさい。

- 1 この問題用紙は15ページある。ただし、白紙はページ数に含まない。
- 2 試験時間は60分である。
- 3 解答用紙に印刷されている受験番号が正しいかどうか、受験票と照合して確認すること。
- 4 監督者の指示にしたがい、解答用紙の氏名欄に氏名を記入すること。
- 5 解答は、すべて解答用紙の所定欄にマークするか、または記入すること。所定欄以外のところには何も記入しないこと。解答欄は裏面にもある。
- 6 問題が指示する数より多くマークしないこと。
- 7 解答は、必ず鉛筆またはシャープペンシル(いずれもHB・黒)で記入すること。
- 8 訂正する場合は、消しゴムできれいに消し、消しくずを残さないこと。
- 9 解答用紙は、絶対に汚したり折り曲げたりしないこと。
- 10 解答用紙はすべて回収する。持ち帰らず、必ず提出すること。
- 11 この問題冊子は、必ず持ち帰ること。
- 12 解答をマークするときには、記入例を参照すること。

| 良い例 | 悪い例 |
|---|---|
|  |    |

(マーク記入例)

(一) 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

建築における装飾文化は、二十世紀においては衰退し、建築の象徴性や装飾性は、極力排除されるようになった。鉄、コンクリート、ガラスというパウハウス^(注¹)・スタイルの素材が用いられ、二十世紀では無機質の新しい建築デザインが主流となる。増大する建築素材の需要をまかなうために、これらの大量生産方式が開発され、建築も時代の変貌と深くかかわり、資本主義の発展プロセスのなかに組み込まれていった。

二十世紀の建造物の外面は、ガラスとコンクリートに覆われた高層ビル群という、即物的な現代都市の景観をつくりだした。しかもコンクリートと「ガラスの増殖」^(注²)現象は、建築の垂直志向と結びつき、二十世紀をリードしてきたアメリカの都市の景観を変えていった。その象徴的な建物は、有名なエンパイアステートビル(一九三二年)である。ニューヨークに出現した摩天楼は、アメリカの時代を誇示し、アピールするものであった。

建築史家レーウエンは『摩天楼とアメリカの欲望』のなかで、超高層ビルを教会施設のない「商業の大聖堂」という比喩で呼んだ。「商業活動の中心点に打ちこまれた塔の杭は、舞台装置でもあり、さらには自由貿易、自由主義競争^{レセフエール}、競争などの原理を表すためのモデルとしての性格を有していた」(三宅理一・他訳)。さらにレーウエンは、アメリカ資本主義とキリスト教との関係について、次のように指摘している。

多くのヨーロッパ人にとって金儲けをすることは罪深い行為であるが、アメリカ人は品位の許容範囲をはるかに越えてそれを追求した。聖書によれば、キリスト教信仰は、ビジネスとはまったく相容れないものであるが、アメリカ人の場合は、キリスト教を多様な解釈で包みこみ^①、大いなる創意をもって自由を獲得したのである。ひたすら金儲けのために働くことは、封建的な旧世界に対する新世界の民主主義的な答えとしておおいに尊重された。

当時は世界恐慌直後という時期ではあつたけれども、エンパイアステートビルは I のシンボルのビルとみなされ、四三メートルという高さは、長く世界一の座を確保する。それは物理的、経済的高さであつて、アメリカ人にはモラルの高さから富を再分配するという発想はなく、かれらは利潤の追求にキョウホ^aンしていった。

大量生産、大量消費は資本主義の原理であり、ヨーロッパ文明を継承したアメリカ文明のポリシーであつた。郊外型の巨大な売り場面積を占めるスーパーマーケットが肥大化し、大きな看板、ガラスの陳列ケース、そして自動車による買い物というアメリカン・スタイルは、バブルの一時期、美德のようにフイチョウ^bされたことがある。現在の日本やヨーロッパでも同様なシステムができあがり、マーケット・リサーチによつて、CMが作製され、各種メディアからそれが連日流されている。資本主義の原理は、コマーション^cで購買力をアオリ、商品を流通・回転させ、利益を目指すものである。このシステムは今後も継承されていくことになる。

結論的にいえば、キリスト教の大聖堂は神への志向であつて、また王侯の宮殿や独裁者の建築物は権力誇示そのものであり、さらに独占資本の牙城である超高層ビルは、富や欲望のシンボルであつた。ところがその後、林立してくる超高層ビル群は、各階ごとのつながりを分断してしまい、さらにエアコンは窓の通風という機能をクチク^dし、自然からの乖離現象を促進していった。壁によつて遮断され各部屋は、現代社会と同様にカプセル化された孤立空間の様相を呈している。

都会は人間の原点である安らぎの空間ではなく、無機質化されたガラスとコンクリートが林立した、ジャングルと化している。これは装飾という遊び心を廃し、徹底的に非芸術化された現代建築のゆき着いた世界である。

二十世紀初頭から人びとが合理性や機能性を追求してきたが、生みだされたものは、無機質の分断された都会の風景である。現代建築は高層化し林立しているけれども、

II を欠き、もはやサグラダ・ファミリアに打ち込んだガウディの力トリス^(注3)クへの熱狂もなく、またパウハウスのグロピウスが提唱した、総合芸術としての建築の統合性の理念とも乖離してしまつた。しかしこの帰結は、自由競争や「資本の論理」が生みだした、垂直志向の現代社会の宿命でもあつたのだ。^(注5)

二〇〇一年九月二日、ニューヨークの世界貿易センタービルに対する航空機テロは、現代社会の矛盾をニヨジツに示している。

一一〇階四一〇メートルのビルは高層化、鉄骨化、ガラス化された無機質の最先端技術のシンボルにほかならなかった。設計したのは日系アメリカ人であるミノル・ヤマサキであったが、この経済のシンボルタワーを攻撃したのも現代文明の華、航空機のボーイング767である。ビルは当時、多国籍の五万人の職場であり、いわば中世のキリスト教のシンボルである大聖堂になぞらえられる。それゆえイスラーム原理主義者は、アメリカのシンボルであるこのビルを標的にしたのである。

あわせてテロのもうひとつの攻撃目標に、軍事部門の中核である国防総省のペンタゴンが狙われた。第二次世界大戦中に建設された建物で五角星形(ペンタゴン)は、防衛のシンボルとしても知られるが、攻撃目標が軍事力に対するものであったことが明らかである。したがって経済と軍事部門に対するテロは、相互に連動していたことがわかる。

欧米の高層ビルと軍事力という資本主義のシンボルは、アメリカの世紀をつくりだした二十世紀前半の「摩天楼」の伝統に根ざすものであった。広大な土地のあるアメリカで、都心に林立する高層ビルはやはりヨーロッパ文明の伝統である「塔」という思想を受け継いできたものである。それは最小の土地で集中的に最大の効率を生みだす、資本主義の欲望のメカニズムを象徴化したものにほかならなかった。くわえて軍事的パワーも頂点を目指す

III 思想に裏打ちされ、それを支える体制であったが、テロはその横腹にいきなり大きな風穴を開けたようなものであった。

九・一一テロの結果、ビルが崩れ落ちた後の巨大なクレーターは、文字通り資本主義の墓標にほかならなかった。それは約三〇〇〇人の犠牲だけでなく、さらに何十倍何百倍の涙の根源であった。核と強大な軍事力をもつアメリカであつても、テロには力③の論理は通じず、即効的には何の対抗策も講じることができなかつた。たしかにこの事件が引き金となって、アメリカは報復としてイラク戦争をひき起こしたといえる。

ブッシュ大統領の「敵か味方か」という二項対立の論理は、もとを質せば一神教の思想に由来する。現在でもアフガン紛争において、アメリカおよび同盟国の強大な軍事力をもってしても、テロという攻撃に対して有効な対応策を講じることが困難な状

況に立ち至っている。イラク戦争の検証の結果、アメリカの論理の「正義」は、一方的なものであることが露呈した。すでにヴェトナム戦争の挫折によって、アメリカの力の論理に陰りが見えていたが、中東への軍事介入は、ボデイブロー^(注6)のようにアメリカを弱体化させていった。

資本の論理は、アメリカ国内にも過疎と集中という矛盾とアンバランスをひき起こした。しかしそれだけではない。アメリカ・モデルは現代文明の原動力であるのでグローバル化しており、同様に、日本もそれに追従してきた。さらに多くの発展途上国もそれを目標にしたが、結果的に格差社会、民族戦争、環境破壊、南北問題をひき起こし、大量生産・大量消費の連鎖の構造は、極端なアンバランスを生み出した。中沢新一氏はその帰結として、「対称性の世界」が崩れ、生まれた「非対称性の世界」を次のように分析する。

「貧困な世界」は自分に対して圧倒的に非対称な関係に立つ「富んだ世界」から脅かされ、誇りや価値をおかされているように感じている。じっさいのところ「富んだ世界」は一極集中化しつつあるから、それに応じてますますこの非対称性はきわだつようになっていく。圧倒的な政治力・軍事力・経済力を存分に行使して、「富んだ世界」は「貧困な世界」を小児化してしまおうとしているから、自分たちの内部に贅沢品や神との直接的な結びつきを汚すさまさまな媒介システムを移植されている「貧困な世界」は、それを屈辱とも冒瀆とも暴力とも感じている。このような圧倒的に非対称な状況は、テロを招き寄せることになるだろう。(『緑の資本論』)

いうまでもなくこれは、アメリカに対して行使された九・一一の「同時多発テロ」の分析である。たしかにヨーロッパ文明の延長線上に、アメリカ文明が金権主義、軍事力のアンバランス、貧富の差という極端な矛盾を生みだしてしまった。その結果、弱者の怒りが最終的にはテロをひき起こしたというのである。

「非対称性の世界」では、人間同士、人間と神との関係、人間と共同体、国家同士、南北問題などの点において、関係をずた

ずたに分断してしまった。繁栄した社会の背後には、すさまじい不毛の荒々しい世界の風景が、われわれの視野に入ってくるのである。だからといって、はげしい怒りや怨念から、捨て身のテロや破壊行為に走ることが容認されるわけがない。それはまた復讐の連鎖をひき起こし、ますます泥沼に足をとられるだけである。そうならないために、人間の繋がりが分断された現代において、もう一度、人間の共同体の原点である大地に根ざした人間存在の意味を再検討する必要がある。

現代の非対称の時代のなかで、二十一世紀の人びとは「機能性」「利便性」を目指して、さらに鉄骨とガラスを使った超高層ビルを建設し続けた。窓も同様に都市の発展とともに、増殖を繰り返してきた。従来の自然のなかで生活してきた人間は、都市のなかではますます自然から乖離し、天空の住人になった。いわばかれらの頂点にいるアメリカの独占資本は、「神の位置」から世界へビジネスの情報を発信してきた。人びとは世界貿易センタービルの崩壊を、鉄骨とガラスでできた巨大なビルの崩壊と認識できても、それを垂直化の象徴であるアメリカ文明の非対称の矛盾と理解したり、是正することに思いをめぐらせたりしなかった。

(浜本隆志『「窓」の思想史』より)

*文中に一部省略した箇所がある。

注 (1) バウハウス……二〇世紀前半のドイツに在った造形芸術の学校。後の芸術や建築デザインなどに多大な影響をのこした。

(2) ガラスの増殖……ここでは、建築素材としてガラスを使用した部分の面積が飛躍的に増大したこと。

(3) サグラダ・ファミリア……一八八三年以来、スペインのバルセロナに建築中の大聖堂。

(4) ガウディ……スペインの建築家(一八五二〜一九二六)。サグラダ・ファミリアの設計者。

(5) グロピウス……バウハウス創設の中心となった建築家(一八八三〜一九六九)。

(6) ボディブロー……ボクシングで腹部を打つパンチのこと。

問1 傍線部 a ~ e のカタカナの部分に漢字で書いた場合の二重線部の字と、部首などの構成要素が同じ漢字が波線部にあるものを1~8の中から選び、その番号をマークせよ。

a キョウボン b ファイチョウ c アオリ d クチク e ニョジツ

- 1 結婚後に夫のセイを名乗る。
- 2 人前で話すのははずかしいものだ。
- 3 前例をトウシユウする。
- 4 経済が急速にヒヘイしてきている。
- 5 ワズラわしい仕事から解放されたい。
- 6 「暑さ寒さもヒガンまで」
- 7 その機械はロウキユウカしている。
- 8 仕事上の失敗のためにサセンされた。

問2 傍線部①「大いなる創意をもつて自由を獲得した」とはどういうことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 経済活動の象徴である超高層ビルを、ガラスとコンクリートで造られたビジネスの大聖堂と意味づけることによって、資本主義のもつ競争原理を隣人との共生を重視する思想と一致させたということ。
- 2 自己の金銭的欲望の肯定は旧来の倫理においては神の教えにそむく考え方とされたのだが、競争原理の追求にともなう自由と独立とを至上とする価値観によってそのやましさを正当化したということ。
- 3 伝統的に利潤追求の行為が罪悪とされてきたこと、ひたむきに働くことを美しいとする非ヨーロッパ的労働観との間の矛盾を、商業道徳の進歩に新時代のモラルを見いだすことで克服したということ。
- 4 アメリカ市場において形成された、なりふり構わぬ自由競争のルールが信仰心を抑制した結果として、新たなビジネスに参加することで得られる金銭的な豊かさが幸福の指標となったということ。
- 5 人々の購買欲を持続させるマーケティング・リサーチのような方法によって、超高層ビルの物理的な高さが象徴するような高度消費社会のシステムを、民主主義の原動力とすることに成功したということ。

問3 空欄Iを補うのにもっとも適切な語句を次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 アメリカ文明が実現した高度な技術力
- 2 アメリカにおける正義の概念の多様化
- 3 アメリカで確立した自律と独立の原理
- 4 アメリカ市場の恐慌にも揺るがぬ潜在力
- 5 アメリカ流の聖書解釈が示す自由と獨創性
- 6 アメリカの資本主義に内在する成長志向
- 7 アメリカ政治が追求する強大な力の論理

問4 傍線部②「徹底的に非芸術化された現代建築のゆき着いた世界」とはどのようなことか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 二十世紀に飛躍的に発展したアメリカ資本主義を牽引する独占資本が、経済的効率を最大化して貧欲に利潤を追求するポリシーの象徴として超高層ビルを競って建てたため、ニューヨークのような大都市の景観が即物的で冷たいものになってしまっただけでなく、そうした思想が世界に拡がった結果として、人間の心から安らぎが失われ、孤立する人々を多く生み出してしまい、その果てに悲惨なテロまで誘発するようになったということ。

2 大量消費を美德とし、商品とお金を流通させることに専心する資本主義社会が、その思想に合わせて建築のデザインを発展させてきた結果として芸術的要素はしだいに抜け落ちていったが、元来そうした要素がもつ自然を模倣するという機能によってもたらされる安らぎや快適さも失われてしまい、富を積み上げようとする競争ばかりが人々の生きる原理となったことを、現代の都市が象徴しているということ。

3 いわば「商業の大聖堂」と意味づけられるものでありながら、サグラダ・ファミリアのデザインにカトリック文化を体現することに注力したガウディが示したような美の追求や、バウハウスが重視したような建築を総合芸術とみなす姿勢が、現代の高層建築の設計思想から排除されてしまった結果として、超高層ビルが林立する都市では、人々の行動から品位が失われ、金儲けが罪悪ではなく美德となってしまったということ。

4 超高層ビルは狭い土地を効率よく活用するという点で合理的な建築物であるが、さらに経済的合理性や機能性を追求するあまりに、大量生産できる無機質な素材や建設作業を簡素化するデザインを安易に用いすぎた結果として、以前の建築にあった神や自然とのつながりを表す芸術的要素が希薄になって、都市住民の心から安らぎや遊びの精神などの余裕が失われ、渴望されるようになっていくということ。

5 効率化優先のシステムに最適のデザインや素材を追求しながら高層化していった結果、外部に対しても、内部の空間同士も孤立化する傾向を強め、そこに集う大勢の多様な人々も効率を優先して行動するような空間となってしまった現代建築が林立するニューヨークの摩天楼の都市風景は、資本主義の論理に人間同士の関係性も飲み込まれてしまったような二十世紀社会の一面を象徴しているということ。

問5 空欄Ⅱを補うのにもっとも適切な語句を次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 有機的な統合性
- 2 文化的な独創性
- 3 空間的な有用性
- 4 思想的な一貫性
- 5 社会的な協調性

問6 空欄Ⅲを補うのにもっとも適切な語を文中から抜き出せ。ただし空欄Ⅲは二箇所あり、同じ語が入る。

問7 傍線部③「テロには力の論理は通じず、即効的には何の対抗策も講じることではできなかった」とあるが、このことは本文の文脈ではどういう意味になるか。その説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1 アメリカの強大な軍事力は、経済格差に代表されるような世界の非対称性を拡大しつつづけるアメリカ資本主義の欲望のメカニズムを支えるものであるため、そうしたメカニズムそのものに対する怒りに起因するテロ行為への対抗手段としては十分に機能せず、むしろ逆に相手の怒りを引き出してしまうということ。

2 アメリカ文明が確立した資本主義の論理は、独占企業に富が集中するシステムを持続しつつづければならないために、局所的には莫大な富が蓄積される一方で、アメリカ国内においてすら経済的なアンバランスや矛盾を生み出し強化してしまうことを避けられず、テロに対する国民の意識も、もはや統一しがたくなっているということ。

3 アメリカの資本主義がグローバル化によって国外にもたらした矛盾やアンバランスは、たんに貧富の差を拡大させるのみならず、環境問題や民族紛争を解決困難なまでに複雑化させるなど、世界的な規模にまで憎悪と対立を助長しつつづけており、圧倒的なアメリカの経済力や軍事力をもってしても、もはや対処しきれなくなっているということ。

4 アメリカにおける力の論理とは、自由と競争の原理を第一とするアメリカ流の資本主義と民主主義とを背景に、さらには一神教に由来する個人主義の思想によって支えられ発動するものであるが、欲望肯定のメカニズムを強化しすぎたため、国民も企業も過度に利己的にふるまうようになり、力を統合することが困難になったということ。

5 ヨーロッパ由来のキリスト教文化を核とするはずのアメリカ社会だが、高度に資本主義を発展させた二十世紀を通してその独自性が際立ってきてしまったために、国内で多数の支持を得られる正義の観念も、現代のヨーロッパ諸国においてすら、なかなか共感を得られず、ましてそれ以外の国々を説得することが出来なくなっているということ。

(二)

次の古文はI IIとも『古来風体抄』の一節である。Iは志賀寺の老法師が一度、目が合ったことのある京極御息所のもとを訪ね、『万葉集』の歌人大伴家持が作った「初春の初子の今日の玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒」の和歌をうたい、御息所がそれに返歌するという話、IIはその万葉歌を取り上げ、古歌の利用について筆者の考えを述べたものである。それを読んで、後の問に答えよ。

I 老法師の腰二重なるが、杖にすがりて参りて、見参し侍りし老法師こそ参りたれと申しければ、しばしは聞き入るる人もなかりけれど、ひねもすに立ちてあまりにいひければ、かかることなん申す者侍ると申しければ、しかることあらんと仰せられ、南の面の日隠しの間に召し寄せて、いかなることぞと問はせ給ひければ、しばしばかりためらひて、志賀にこの七十余年ばかり侍りて、ひとへに後世菩提のことを営み侍るに、はからざる見参を仕うまつりて、いかにもいかにも異思ひなく、今一度見参の心のみ侍りて、寝候ふも寝られず、起きても安く居られず侍れば、年ごろの行ひの徒らになりなんことの悲しさに、もし助けもやせさせ御座しますとて、杖にすがりて泣く泣く参りて侍るなりと申しければ、いと a ことなりと宣ひて、御簾を少し上げて見えさせ給ひければ、面の皺数も知らず、眉は白き雪などにもまさりて、皆老い変りて、人ともおぼえず。まことに恐ろしげなる様にして目守り入れて、とばかりありて、その御手をしばし給はらんと申しければ、申すに従ひて御手をさし出だし給へりけるを、我が額に当てて、よろづもおぼえず泣き入りて、かの「手にとるからに」といふ歌を詠みかけ申して、この世に生まれ侍りて九十年に及び侍りぬるに、またかばかりの喜び侍らず。この縁を以て思ひのごとくに弥陀の浄土に生まれ侍りなば、必ず導き奉らん。また、浄土に生まれさせ給はば、導かせ給ふべしと申して泣きければ、御返し、よしさらばまことの道の導して我を誘へゆらぐ玉の緒

とぞ仰せられける。これを聞きて、喜びながら帰りにけり(以下省略)

II この事を思う給ふるは、この歌は、たとひ万葉集にあるにても無きにても、いかにも昔の歌にこそ侍るめれ。それを古き歌をも、今あることそのことに叶ひたる時は、詠じ出づることはある事にや。かの志賀の聖(注2)今詠めるならば、「手にとるからに」といはん事はしかありとも、その参りたりけん日、もし春の初めの初子の日にしもあらずは、玉箒にことによそふべしとも覺えずやあらん。なかなかさやうの聖などの、この古歌を知りて、「手にとるからに」といはんために思ひ出でてかくいひたらんは、玉箒も今少しことよりてやあるべからん。

(注1) 京極御息所——藤原時平の女褒子のこと、宇多天皇が讓位して法皇になつてから御息所となつた。

(注2) 志賀の聖——志賀寺の老法師のこと。志賀寺は大津市南滋賀に建立された崇福寺。

問1 空欄 a に入れるのにふさわしい語を次の中から選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | |
|------|--------|-------|------|---------|
| 1 難き | 2 うれしき | 3 苦しき | 4 易き | 5 おもしろき |
|------|--------|-------|------|---------|

問2 傍線 b の漢字のよみをひらがなで書け。

問3 傍線①②④の主語として適切な語を次の中から選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | |
|-------|-------|------|------|------|
| 1 老法師 | 2 御息所 | 3 筆者 | 4 女房 | 5 法皇 |
|-------|-------|------|------|------|

問 4 傍線③⑥の口語訳としてもっとも適切なものをそれぞれ1、4の中から選び、その番号をマークせよ。

- ③ 1 数年来のつきあいがむなししいものとなった
- 2 長年の修行が無駄になってしまっただろう
- 3 年配の人の経験が役に立たなくなってしまう
- 4 ここ数年の間に親しい人が亡くなってしまった

⑥ 1 確かに昔の歌であるようだ。

- 2 どう見ても昔の歌であるはずがない。
- 3 なんとかして昔の歌に仕立てよう。
- 4 いずれにせよ昔の歌ということだ。

問 5 傍線⑤はどのような気持ちをもっているか。次の中からもっとも適切なものを選び、その番号をマークせよ。

- 1 九十歳までの苦しい修行によって、私を必ず出家得度に導いてくれるだろうと安心する気持ち。
- 2 九十歳というめでたい長命によって、私を極楽浄土に導いてほしいと願う気持ち。
- 3 九十年におよぶ長い人生経験によって、私から迷いを消し去ってくれるに違いないと確信する気持ち。
- 4 九十年にわたる仏道への信仰によって、私に弥陀の浄土が見えるようにしてほしいと期待する気持ち。

問 6 筆者は、志賀の聖が傍線⑦の「手にとるからに」の古歌を詠もうとするきっかけとなった御息所の行為についてIで詳しく述べているが、その行為を御息所に依頼する聖の言葉がある。それをIの文中から抜き出し、最初と最後の三字を書け。

問7 『古来風体抄』の筆者とはどのような人物か。合致するものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 『金葉和歌集』の撰者である藤原顕輔の子で、『詞花和歌集』の撰者である。
- 2 『千載和歌集』の撰者である藤原俊成の師で、『金葉和歌集』の撰者である。
- 3 『新古今和歌集』の撰者の一人である藤原定家の父で、『千載和歌集』の撰者である。
- 4 『金塊和歌集』の撰者である源実朝とは兄弟で、『新古今和歌集』の撰者の一人である。